

DOCUMENT EYE

148



観察地点 / 東京都渋谷区円山町1「松濤郵便局前」交差点付近
 観察日 / 5月9日(木曜日)
 天候 / 曇
 観察時間 / 15:45 ~ 16:45
 観察者 / 4名

赤信号の交差点を見切り横断する歩行者を観察する 1時間の間に見切り横断をした歩行者 1942名中433名

WHY

赤信号の交差点を見切り横断する歩行者は?

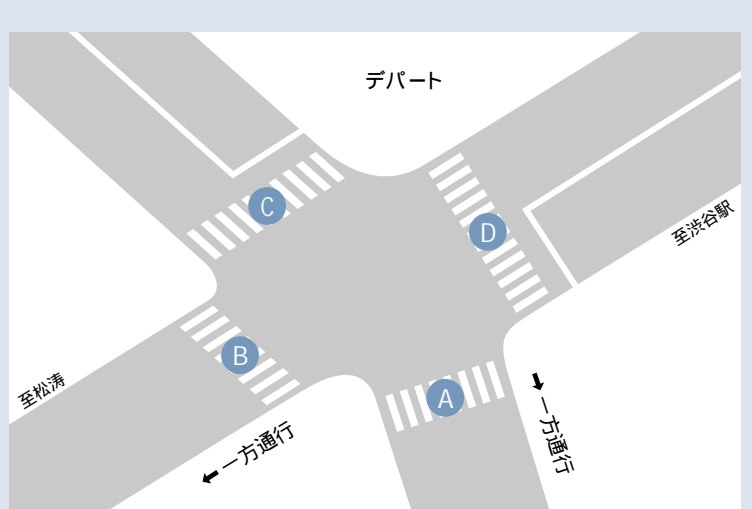
歩行者用の信号機のある交差点では、「青信号」に進むことができる。「青信号」の点滅＝横断をはじめるにはいけない、「赤信号」＝横断をしてはいけない」とその指示に従って道路を横断しなくてはならない(交通の教則 基本版)にもかわらず、赤信号で道路を横断したり、赤信号から青信号に変わる間に「見切り横断」をはじめる歩行者が後を絶たない。

平日の夕方、東京の渋谷駅周辺で歩行者用の信号機のある交差点で歩行者の横断を観察した。

WATCHING

赤信号みんなで渡れば怖くない? 集団で信号無視する学生たち

観察場所はJR渋谷駅から広がる商業エリアの「松濤郵便局前」交差点。歩行者用の信号機が設けられているA・B



歩行者用の信号機のある交差点を横断する歩行者(1,942名中)

	赤 (見切り横断)	青	青の点滅	赤	計
子ども	0	19	0	0	19
大人	402	1,149	126	70	1,747
高齢者	31	111	15	19	176
計	433	1,279	141	89	1,942

(各1車線)・C・D(各2車線)の4カ所の横断歩道を観察した。周辺にはデパートや映画館、学校などがある。平日の夕方ということもあり、買い物客のほか小学生たちなど、幼児から高齢者まで幅広い層の歩行者が行き交っていた。

観察は、歩行者用の信号機が「赤(見切り横断)」「青」「青の点滅」「赤」の4つのパターンで、小学生以下とみられる子ども・大人(学生を含む)・65歳以上とみられる高齢者で分類した(すべて観察者の推測)。

1時間の観察の結果、子どもは19名全員が青信号で横断していた。ところが、中学生以上になると、大人1747名中、青信号で横断したのは1149名、残りの歩行者のうち見切り横断をした歩行者は402名も観察された。その多くは、クルマの接近を確認後、クルマが来ないことがわかると横断してしまつたといったものだった。また、信号待ちをしても、

1人が渡りはじめると5人、10人と集団で渡りはじめる姿が目立った。特に、学生たちに多く、1人が渡りはじめると周りの状況や気配で歩き出してしまうようだった。また、ベビーカーを押しながら見切り横断をする女性も観察された。

赤信号を無視した歩行者に対してクルマがクラクションを鳴らした例が4例中には、「またひかれそうになっちゃった」と笑いながら会話を続ける女子高生たちもいた。携帯電話の画面を凝視しながら渡ってしまう歩行者も少なくなかった。

高齢者は、176名中111名が青信号で横断していたが、青の点滅で交差点の数10m先から小走りややってきて、交差点内で赤信号になってしまつた光景を何度か目撃した。

また、車道上で信号待ちをする歩行者が多いのが気になった。

PROPOSE

信号の意味を正しく理解し 交通参加者の手本となる行動を

今回の観察で、見切り横断をする大人の歩行者が非常に目立った。その多くは周囲の気配で歩きはじめ、信号をほとんど見ていないようだった。免許保有年齢である大人たちが「急いでいるから」「クルマが来ないから」という自分勝手な判断で信号を無視することは、周りの交通参加者に迷惑をかけた。事故を起こしかねないだけでなく、手本を示すべき子どもたちにも悪影響を及ぼすことになる。

また、盲導犬は交差点を横断する時に、信号の色を識別しているのではなく、周囲の状況に合わせて視覚障害者を誘導しているという。健康者の自分勝手な行動が事故を引き起こさないためにも、交通ルールを守ることは社会人の責務であることを肝に銘じて行動してほしい。



ここで言う「見切り横断」とは、横の信号が赤のときに、前方の信号が赤であるにもかかわらず、横断を開始すること(編集部の見解)